

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：24402

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652061

研究課題名（和文） 惣構の理論的・実践的検討

—近世城下町像の再構築と「町づくり」への活用—

研究課題名（英文） The theoretical and practical examination about citywalls

The reconstruction of images about castle towns in early modern and the practical use to town plannings

研究代表者

仁木 宏 (NIKI HIROSHI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90222182

研究成果の概要（和文）：岐阜、金沢、小田原を対象に、惣構と城下町形成の関連について解明し、「町づくり」への活用方法を交流した。惣構は、防衛のためだけでなく、城下町を周辺地域から区別するためにも造られた。惣構を調査、保存、活用することで、その都市の個性が明確になり、市民のその都市への愛着を生み出すことができる。惣構研究は、理論と実践の両面から進められなければならない。

研究成果の概要（英文）：For GIFU, KANAZAWA and ODAWARA, I solved about the relation between citywalls and the formation of castle towns, and alternates about the method of practical use to town planning. Citywalls were built, not only for defence, but also for distinction from a surrounding area. We can clarify the individuality of the city by the investigation, preservation and practical use on the citywalls, and create an attachment of citizens to the city. We must advance the research of citywalls from both sides of theory and practice.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	0	700,000
2010年度	1,000,000	0	1,000,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	390,000	3,390,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：城下町、惣構、総構え、町づくり、金沢、岐阜、小田原

1. 研究開始当初の背景

近世城下町における惣構は、家臣団居住区と町人居住区の境界や、城下町と周辺農村との境に築かれた。本丸、二の丸などからなる城郭中心部が政治空間であり、その中で生活

したのが城主とその一族に限られるのに対し、惣構の内側には家臣団屋敷や町屋が建ちならんでいた。城郭中心部が高い石垣と広い水堀によって周囲から屹立しているのに対し、惣構の多くは土塁であり、堀（空堀）も

小規模であった。惣構の内外には都市社会が展開していたのである。

惣構は京都・堺、寺内町など、戦国期の自治都市にはじまり、戦国末期から織田政権期に畿内と東海・北陸の城下町に採用された。城下町は、自治都市に対抗して商人・職人を獲得するため、町人居住区を含めて惣構で圍繞し、都市の「平和」を保障した（仁木『御土居』への道 日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』2001年）。しかし、豊臣政権期になると、武士と町人の身分格差を視覚的に表現するために、家臣団居住区のみを囲む惣構が一部に出現する（小島道裕『戦国・織豊期の都市と地域』2005年）。宮本雅明（建築史）は近世城下町を、惣構が町人居住区を含む都市全域を囲う「総郭型」と、家臣団居住区を中心に囲う「町郭外型」に二分し、全体として前者から後者にその構造を遷移させていったことを明らかにした（宮本『都市空間の近世史研究』、2005年）。ただ、そうした変化の原因、社会的背景については十分に分析できていない。惣構は、城下町における大名・家臣団、町人などが形づくる社会構造を空間に現出したものであり、惣構のあり方を分析することで近世城下町の構造を解明することができるのである。

近年、備前岡山、阿波徳島などでは惣構が発掘調査され、加賀金沢、会津若松などでは惣構が文化財として保存され、町づくりに活用されている。だが、城郭中心部と異なり、近世城下町の惣構のほとんどは現在、市街地のなかに「埋没」し、その文化財としての価値は行政にも市民にも忘れられている。惣構が城下町において果たしていた積極的な役割を十分認識できなくなっていることが原因であろう。そこで、本研究では、惣構の歴史的意義を明らかにすることを通じて、その保存・活用に向けての理論的、実践的基礎を

構築したい。

2. 研究の目的

(1) 惣構の実態を明らかにする。 全国の城下町における惣構の空間構造（広がり）と物理的構造（土塁／石垣。空堀／水堀、河川に接するの）を分析する。**(2) 惣構の意義を解明する。** 城郭中心部、家臣団居住区、町人居住区などと惣構の位置関係から近世城下町の類型化をおこなう。織豊期からの変化、地域的特性なども加味し、惣構の歴史的意義を理論的に明らかにする。**(3) 惣構の現状を集約し、町づくりに活用するための提案をする。** 地上に残る惣構の状況、発掘調査の報告などをデータベース化する。金沢市、岐阜市など、先進的な事例を広く紹介し、惣構を「再生」、活用する方法を交流する。

惣構（都市城壁）に注目することで、日本において中世都市が変容して近世にいたる都市史の流れを明らかにし、近世城下町像をこれまでとは異なるレベルで再構築する。また、惣構の社会的機能にかかわる理論的分析を基礎におくことによって、その文化財としての価値を明確にする。惣構を保存・活用するための実践的な方法の提案は、全国において近世城下町をいかした町づくりを進めるための指針を提供するものとなる。

3. 研究の方法

(1) ①全国の近世城下町を析出する。 宮本雅明によって主要城下町137ヶ所があげられている（宮本『城と城下町』朝日百科／国宝と歴史の旅 5、2000年）。これは天正2年(1574)以降に建設されたものに限られており、本研究ではそれ以前にできた分を加える。また豊臣政権期から元和年間にかけて城破りや一国一城令によって廃された城郭にともなう城下町のうちに惣構をとまなうものも少なくない。これらのいくつかも加える。

②城下町絵図を収集する ①で析出された城下町について城下町絵図の存在を確認し、できるだけカラー版で収集する。本研究での利用法からいって精密な写真を入手する必要はない。博物館・資料館の展示図録や一般に公刊されている図書、Web上の写真を収集する。

③惣構の位置を比定する ②で収集した城下町絵図を近代の地形図上に投影し、その広がりや位置を比定する。明治時代に作成された正式2万分1地形図では、惣構の罫（土罫、石垣）・堀跡が確認される場合が多い（一部の地域では古い2万分1地形図が発行されていないため、2.5万分1ないし5万分1地形図で代用する）。地形図をスキャナでとりこみ、作業はパソコン上でおこなう。電子データとして保存・蓄積する。

(2)近世城下町の空間構造論、惣構研究の再整理 これまで歴史地理学、建築史学（都市史学）などで行われてきた近世城下町の空間構造論を整理し、論点を明確にする。矢守一彦（戦国期型、総構え型、内町・外町型、郭内専士型、開放型）、宮本雅明（総郭型、町郭外型）など、それぞれの概念を再検討するとともに、先行する戦国・織豊期城下町の惣構についての研究も収集、整理する。福島克彦「文献史料からみた『惣構』について」（『中世城郭研究』14、2000年）、千田嘉博『織豊系城郭の形成』（2000年）など城郭史研究にも目配りする。

(3)惣構の現状調査 地上に残る惣構については何らかの形で文化財と認識されている場合が多い。自治体史、市町村の文化財案内などの刊行物や市町村教育委員会ホームページの文化財紹介などでそうした惣構を博搜する。

4. 研究成果

(1)空間構造論にかかわるシンポジウムの開催

ゲストスピーカーに迎え、文献史（研究代表者）を含む3者から理論的提起を行い、惣構論の現状と課題を確認する。岐阜市内の惣構跡の現地見学会を催し、金沢市などの考古学研究成果紹介もあわせておこなった。

・2010年 11月14日（日）シンポジウム「城下町における惣構（総構え）の構造と機能」会場：ハートフルスクエアG 大会議室（岐阜）

高橋 充氏（福島県立博物館）「若松城下町の構想と惣構」、佐々木健策氏（小田原市教育委員会）「小田原城総構とその城下」、向井裕知氏（金沢市埋蔵文化財センター）「金沢城下町の成立過程と惣構の機能」、内堀信雄氏（岐阜市教育委員会）「岐阜城下町惣構の内と外」、中西裕樹氏（高槻市立しろあと歴史館）「近畿の城下町と惣構」、福島克彦氏（大山崎町歴史資料館）「畿内・近国の『境内』『寺内』と『惣構』—非城下町の外郭線—」、乗岡 実氏（岡山市教育委員会）「近世岡山城における惣構の形成と役割」、仁木宏（大阪市立大学）「問題提起」

(2)町づくりにかかわるシンポジウムの開催

近世城下町にともなう「惣構」の残存状況を全国的に紹介するとともに、文化財としての活用方法を提案、交流した。近世城下町の空間構造論、惣構論などの理論的検討から「惣構」の文化財としての価値を明らかにする基調報告をおこなった。また、研究協力者からは、金沢市・岐阜市の先端的な取り組みを紹介していただく。その他、「惣構」の活用を目指す各地の自治体関係者から報告いただいた。

・2012年2月19日 惣構シンポジウム@金沢「惣構を活用した町づくりの未来をさぐる」会場：石川県文教会館

向井裕知氏（金沢市埋蔵文化財センター）
「金沢城惣構の構築史と保護・活用政策の歩み」、内堀信雄氏（岐阜市教育委員会）「岐阜城惣構の過去と現在」、小林隆氏・佐々木健策氏（小田原市文化財課）「小田原城総構－歴史・活用・未来－」、近藤真佐夫氏（会津若松市教育委員会）「若松城惣構の歴史と現状・課題」、高崎章子氏（中津市教育委員会）「中津城惣構の現状と活用への課題」、総括提言 仁木 宏（大阪市立大学）「惣構（総構え）の歴史とまちづくりへの活用」

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①仁木 宏、近江国石寺『楽市』の再検討、都市と城館の中世（千田嘉博・矢田俊文編）高志書院、査読無、2010、87～103

〔学会発表〕（計4件）

①仁木 宏、15～17世紀の都市京都における社会集団とその変容、上海師範大学中国近代社会研究中心・大阪市立大学都市文化研究センター共同シンポ（招待講演）2012/3/8、上海師範大学

②仁木 宏、戦国時代の高槻領と高山右近、キリシタン文化研究会 大会（招待講演）、2011/12/4、上智大学

③仁木 宏、日本中世における都市の展開－京都、政治都市、港町－、明清史夏合宿（招待講演）、2011/8/11、聖護院御殿荘

④仁木 宏、八上城下町の構造、1617会 兵庫例会、2010/1/31、四季の森（篠山市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仁木 宏 (NIKI HIROSHI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90222182

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし